特41
972

特41
972

東都　萬亭應賀原著
花笠文京重訂

第十三回

美人の薄命

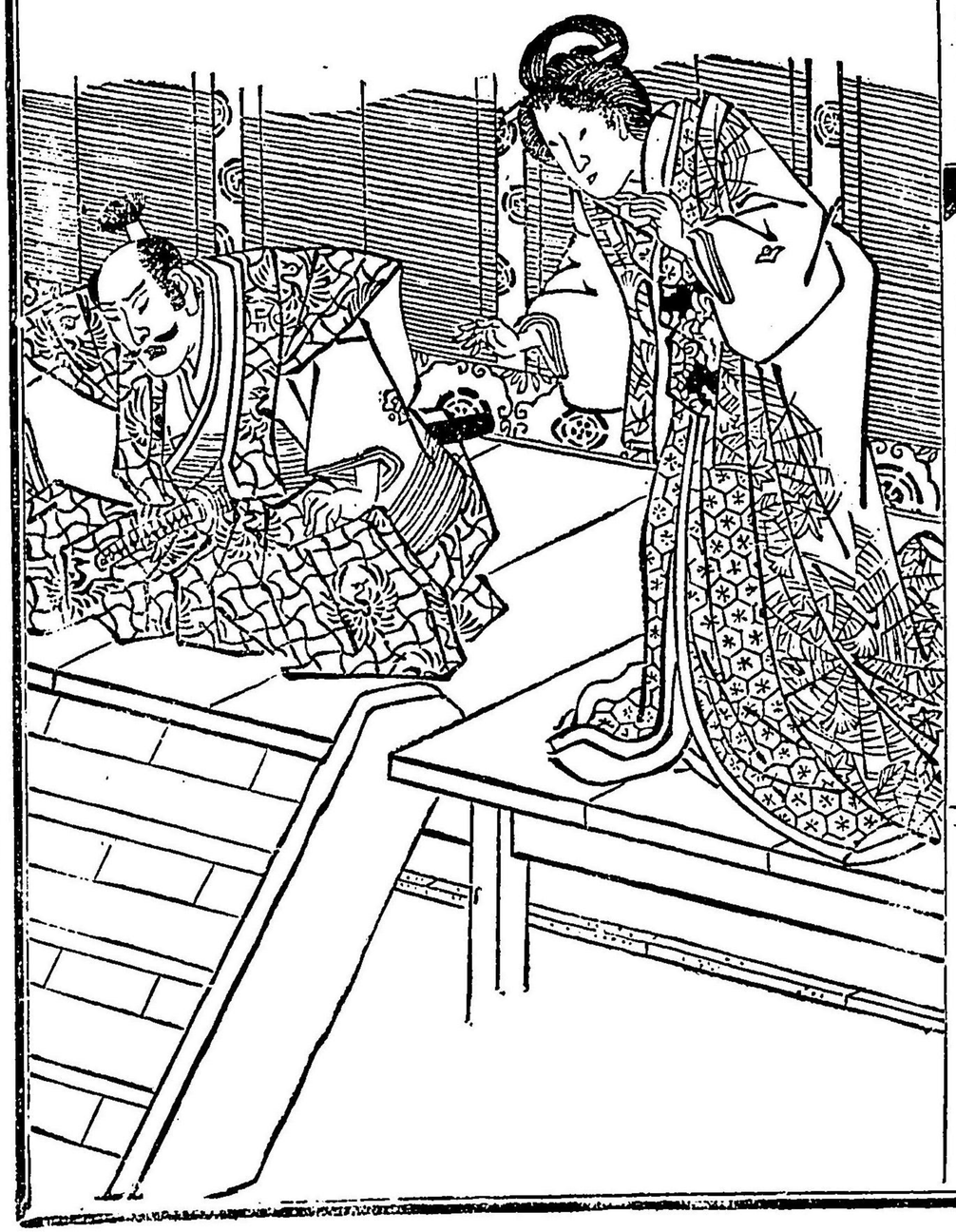
却説輪曇彌い太子の行衛未ざ知れず只ざ是れ暗夜よ燈火を失ひーより尙ほ懶うく歎き悲ーみ居たまふ處へ老女椿花女進み出て密よ奏問遂るよい優陀夷夫婦い謀叛ありて殊更と太子を失ひて難陀太子を御世嗣よ出さんと謀りつ〜好陽婦人の內意を受け惡事を計畫ふ由あれを御油斷いあるまじく急ぎ御前を遠ざけ玉へ爾おくゞ自然御一大事よなりとべふんぢの氣遣いしと己ぢの叛逆の顯れこくちを言ひ防ぐんとの胸算又た二ッよい優陀夷の妻よ羞めふれし口惜さ遣る方おさの腹慰せよ思ふ存分惡ざまよとり拵へて言ひなせゞ輪曇彌い腹持の惡さ矢前お聞くものゝ眞實と思ひて顏色をかへ偖い思ひ寄ふざること悪達太子を擧けーい我か妹摩耶婦人是い表向の妃おり开ぢ僅よ召使ひー見るかげもおさ好陽ぢの淫行ことよて產みあせし難陀太子をれ世嗣とい以ての外の計畫おり左程不埒の夫婦とい今迄知ぬ口惜さよ爾ゞころあれ太子の傅よ心をつゞて冊かせーろこへ狙け入

り彼れ返つて失ふ樣ゑ謀りーか大膽不敵いと惡し左れと帝の御意に入り自ゞ儘ゑもあらず此由具ゑ申上げて夫婦の者を戒めくれん汝ゝ尙は意と注けて夫婦の惡事を發顯そべー又さ耶須陀羅女の身上も汝ゑ任せゞよく計ひ騙ーー嫌して太子の行衛を尋ね出ざせと神あらぬ身の佛け頼んで地獄へ陷る危さ此場の景狀あり却說輪曇彌ゝ南花女が告知せたる事どもを公然ゑ帝へ奏聞せゞ我が妹の最負ゑ聞へ又た帝のた思召ゑ難陀をた世嗣みあさるべきた心あるゝも計られねゞ何とあく夫婦の者を遠ざくへーと腹中ゑさくみ居玉ふ折もよく帝のゝらせ玉しのゞ輪曇彌ゝ進み寄り君今ま優陀夷夫婦を召く云々と仰せあらゞ太子の行衛よもや知れぬと云ふ事あるまじくと告げ玉へゞ淨盤王も優陀夷夫婦ゑ限つてゝ護身影ものあらずと思ひ玉へど千ゑ一ッのお疑ひもある故ゑ夫婦を御前へ召出ーー心ゑ瀞ぬ事どもを逐一尋ね玉ふよ夫婦ゝ謹み申す樣如何にも恐れ入奉つる仰の如く前以て嚴さ御沙汰を蒙りあごふ太子を失ひ奉つり申上ぐべき樣あけれど只此上ゝ天が下を夫婦ごの命根のきりゑ尋ね出せた今ま暫く御宥免下されゝしよも御命ゑ障ゝあらト御心安くあふせられよと述る傍より輪曇彌イヤ優陀夷其の言語ゝ何事ぞや汗も加毘羅城の重役ゝ左大臣の其方と右大臣の光明あふずや只今申上げつる事箇程ゑ重き身分ゑてゝふべき事とも思ゝれず子を失ひて暫ーの間も爭で心やそく居られうか云ふ言葉ゑ事を換へ暫く待とゝ何事ぞ其の愚鈍ある心ゝら帝を始め自ふごの嚴しく申附けし事を等閑ゑゝゑたるありシテ又た太子のお命ゑ恙あいと云ふ事ゝ如何ゑーて知りたるぞさる事あらゞお行衛を知ぬと云ふも胡亂あり此儀返答いかゞゞと云ひ詰め玉へゞ平伏の頭を優陀夷ゝ聊さか擡げ爾れゝ候ふ太子のお命恙あしと申せー仔細奉聞いたさん聞し召されよ太子在さぬ其の翌朝御門を守る雜色們某ーゑ申そを聞々ゞ常ゑ明その威乾門の扉開々て此年頃太子の召たる金蹄も舍人車匿も見へざるよし左それゝ太子ゝ何處へか車匿を俱して行幸あれゞお命ゑ恙あしと推察りくの言葉の端おんとがめゑ預りて恐れ入り奉まつる併ゑ最早遠近とあく僉議の使を馳ふせしゆゑおしつゞ有無も知れべゞ故先づ夫までゝ夫婦の科夫婦ゑ御預々下さるべー否や分りし其上ゝ夫婦の命あにのせん固より君ゑ捧げもの少しも惜ゑ申そまじと述る彼方れもの陰に彼の横邪ある南花女が如何ある由を奏聞そるかと立聞く影のチラと見へしゑ女房ゝ少し進み出で恐れながら御兩方樣太子の事ゝ先づ差ーー置りれ如何ある事を何者ゞ夫婦の上を惡ざまに奏聞そるとて必ずしも眞實あおぼし玉ひそ其身一代慾の爲お侍仕そる者と變り先祖代々召使ゝれ御恩の深き御譜代れ身お爲ゑ依つてゝ夫婦が命塵よゞ輕くそる覺悟と彼方を睥睨ゑ謹しんで述るを聞て轎

曇彌いうち點頭ての玉ふやう何樣ノウ謂と聞々ば左もあるあん爾ながら能く聞きヤれ太子見へあくあと玉ひし其夜の當番い男女とも皆お呵りを蒙りて差し扣へて居るあらずや然らば汝達夫婦とも太子は傅ゆえ事の安否の知るまでい出仕を止め差し扣へく然るべしと仰せよ夫婦いハッと計り返そべき言辭もなく既よ御前と退ぞかんと爲たる折柄遙のある東御門の彼方よ當りて聞馴たる馬の嘶き優陀夷い頭を傾けて只今彼方お聲高く嘶きーい金蹄ならん若しも太子の還御よや何よもせよ見とゞけんと其座を退つてお次の間のお階間よ立出で見れば車匿い金蹄の口綱とり髪を亂て蓬ろーく寢れ果たる面相よて勞れし足と踏み堪へお階間近くへ立寄れば優陀夷い驅下り慌忙ーくヤァ車匿か能く戻りし太子い何處よ在まそぞや早く知らせよ如何よ〳〵とせき立てられて當惑の車匿い涕を搔き拂ひ爾候ふ某下よも豫て太子い只あらぬ御願望あるゆえお優陀夷よと指揮おくんば金蹄を必ふぞ牽くまとと右將軍よと仰せあとーが過つる二月八日の夜半寅の時刻と覺ーき頃太子自ら來らせ玉ひ金蹄と牽々と仰せ玉ふを再三諫め止めなれども御年にも似氣あき御願望事を分たる仰せの旨下郎あがらも感涙を留めかねとる其夜の御行幸左らば御供つりまつらんと金蹄牽き出し召させつ〳〵御口を取り出けるよ不審よも豫てより堅く閉たる威乾門い自然と開けて召させた

る御駒の前後よい諸神諸菩薩四天王臣まぞを守護おして一夜の内よアラ不審や檀特山の寶嶺との云ふ嶮しき嶺お登り玉ひ阿羅羅仙人と云ふものと師弟の契約おさせられ遂よ御出家と遂げ玉ひーと告げも終らず泣伏ーて後い漫ろよ云ひ兼るを優陀夷い訝さず猶や詰め寄りイヤ車匿其れおて事濟ぬ夫れより如何おり玉ひーぞ我か君の御樣子を詳細よ語らぬ者ならば嚴ーき科よ行ふべしサ、其かふい何おりーやハッ臣種々言葉を盡ー還御と勸めまゐらせけれど一切衆生を濟度の爲出家を遂るものあれば止めるい反つて怨みぞとの玉ひて尙は種々よ事と譯さる御說諭爾らば臣何時まぞも忙傍よ冊づき奉まつらんと申せど其も許ぬ玉い忠臣て發心報謝の奥義を學び窮めし其上い此方より還るゆゑ此品々と持歸り帝と始め耶輸陀羅女へ紀念に送り呉ようしと御身の傍りの物どもを脫せ玉ひて渡されければ是非なく受取り奉まつり持歸り候らひぬ最早帝の仰せを背き太子の御意を協へとる此罪よい拙者り命召さるゝ覺悟で宮中へ顏押し拭ひて歸り參りぬ早やく頭と刎ねられて帝の逆鱗を宥め玉へと云ひつ〳〵紀念の品々を優陀夷ふ渡ーて袖袂顏よ押し當て泣伏せい優陀夷も車匿の忠根を最ど不憐と思ひつ〳〵太子の紀念の品携さへ車匿ぞ忙庭よ控へさせ一間の内へ馳せ入い先より物越よ帝と始め轎曇彌も立聞きし玉ひ早くも包みをとり開き御覽あるお目

あれゝる太子の御衣ゆゑ懷かしく顔ゝ押しあて轎屋彌と共ゝ涕ゝ呉れ玉ふ折柄光明大臣ゝ御前間近く進み出で只今太子の御様子ゝ他あら承たまゝりしか最早ゝ行衛知し上ゝ



左程の御愁歎ゝも及ぶまゝ此上ゝ少ゝも早く御迎ひの人夫を差向け迎へ戻ゝ奉まつらんゝ力を添ゝる言葉の端帝も左こそ思召ゝ急ぎ迎ひを遣ゝそべゝと仰せゝ從ひ誰々を其の頭人ゝ遣ゝされんと様々ゝ御詮議あるゝ日頃御意ゝゝなひたる右將軍ゝ勝そものあし之れを御還の勅使ゝと

直ちに彼を召し出し御前に於て命ぜらるれば右將軍畏こみて舍人車匿を案内とおし官人駕輿丁に御輿を舁せ雜色の者五百人都合人夫八千人とかや右將軍の勅によりて太子の召したる金蹄へ直に陸うり車匿を先立て人夫を勵まし引率して檀特山の寶嶺へと飛か如くに赴きける去程に宮中の俄うにさゝめき勇みさち優陀夷夫婦を始めとして太子の失させ玉ひさる其夜當番の女中達皆おく部屋ゝ引籠り差控へて居さりしが御行衛の知さるよしを聞きて少しの心も落付とや〳〵還御あるらんと待ち詫びゐるを道理おる話頭一轉南花の横手を拱き太子の所在とや知れて迎ひの人夫も行されば空て還御もわるべきあり左すれば豫て謀計さる叛逆も水の泡おれば急き手術を回らして事を謀りて呉んずと忍で點頭耶輸陀羅女の部屋へ赴むき欺かるゝ什麼に姫嘲や嘲嘲うのふんぞの开も卑妾ケ汝に強くあさるのも眞事の最惜く思ふゆえ若し打捨て置ときの夥多の者に責めさいおまれ耻に辱をば重ぬるゆえ命も根も續いせと其ゲ最惜さ不愍さに轎壘彌へ自ふ願ひ耶輸陀羅女れ身の上の卑妾へお任せあるとと萬事引受け何ゲなして事なく濟し進ふせんと種々に詫入ども却々容易に許されぬ譯は汝れお腹の兒の密夫の種おれば苟且おふぬ罪人とて大方科も極まれり抑も天竺の刑罪の他國に違ひて四刑あり之を水火稱毒とおうく一に水との水責にて石と人との水に沈め石浮けば其人罪あり人浮ば罪を免かるさて二に火責と云ふの黒鉄の柱を燒き其人に抱うそるにつみあれの泣叫びつみなけれの身を損ねずさて又三に稱と云ふの石と人と衡量に懸け罪あれの人重しつみおければ人輕しさて四に毒と云ふ責の食物の内へ毒を入れ其人お喰しむるに罪あるものの毒に中り罪おさものの中られぬとぞ之と則ち天竺の四刑と名けて定とはするなり假令汝に罪おくて刑罪をの免かれても斯る責に遇し者の存命ん程覺束おし第一女子の身を以て斯る辱めに遇んより自ら死るうましぞかし左る事もあるゆゑお卑妾の種々に考へ見しか最早太子の在しまさず爰の一ッの勘辨どころ汝の心を聞うまゐしと猫撫聲にすり寄れの耶輸陀羅女の鬱憂の重き頭を稍擡げてさて〳〵段々のれ物語り冥加に餘る御親切お腹に胎るの密夫の種と疑かひ懸りての何面目に存命ん聲その思ひに自害して人の疑ひを晴すべし何卒跡の片附を偏へに頼み侍るおと又一ッの願ひと云ふの何卒是まで召使し卑妾か局に只一ト目何ぞ遇せて玉のれの遺言さん事あれのと云ふを打消し滅層な何して其か協ひませう局のおろう子供にも遇せ申を事ぞかりの必ずともに成りませぬ遺言したい事あらの遠慮おして此妾へ何事ありとも云しやんせ必ず達し進らせんと身に引き懸ける親切も何邊に角の見ゐける故耶輸陀羅女もうかとの云ず何か言葉と濁しける南花の猶も聲を

密めイヤのふ能く聞き給へ熟々物理を考へ見るゑ格別ゑもあき事を斯く重々〜く咎められ此明き部屋の憂き暮〜汝の父親も一個の王あり其令孃を斯ゝうり輕々〜く成されたる茲の帝ゑ怨みゝあるとも何の御恩のあるべきや开を死るとゝ淺い智慧茲とかりゑ日ゝ照らず五天竺ゐ隱れあき汝の容色の麗ゝ〜きゝ何處の太子もしり侍れゝ妾ゝ計畫て此御所を密かゑ落〜進らすれゝ本木ゑ勝る餘國の太子へ再度嫁〜て身を落付今の苦勞を免かれ給へ是等の事必ふぞ〜も餘所へあ洩〜ろ一大事と善かふぬ事を勸むれゞ耶輸陀羅女ゝ呆れてテモまア汝とした事ゞあられもなゝ事云ゝるゝぞ假令科なきものあがら如何程の罪ゑあふも身の災難と諦らめ居れゞ御腹の兒を分娩〜委細事を遺言〜く此身ゝ果る覺悟あり如何程責ゑ孫ふとても何この帝を怨むへき素より外へ嫁と事ゝ思ひも寄らぬ事あれゞまァ左樣思ふて下さんせハテまさ〜ても愚痴ゞかりはんゑ懷胎の其兒ゝ密夫の種と云ふ事御所中のとり沙汰あるゑまゞ包みめさるゝか去ゞとゑ其事あれ假令千人萬人の疑がひ受ても妾ゞ心ゑ横邪あけれゞ何とせん人ゝ何とも岩清水清濁ゐをゞ神ゞ〜る此身ゝ捨ても御腹の兒さへ恙あけれゞ身の幸ひ然ゝいへ昨日今日〜のつらさ寧ろの思ひに何事も協ゝぬ事あら親子とも〜ゑ果て仕舞ゞまーあるかと心迷ふゝ女の慣ひ取つ置つの思案あゝゞ南花ゝ豫て謀みたれゞ爾

計らんと心の工夫傍への物蔭ゝ相圖〜て燈火とうと吹消せゞ是ゝと慌ろく耶輸陀羅女物蔭よりゝ一人の曲漢忍び姿で顯ゝれ出て折こそ好けれと探り寄り障る衣服ゝ耶輸陀羅女と利腕とつて捻伏つゝ直ゐ其儘猿轡有無の言葉も出させす豫く南花ゞ手筈の如く忍びの者ゝ耶輸陀羅女を難なく奪ひて片蔭へ早くも退ゞき立隱れぬ恁る所へ夫とも知ぞ命婦は炊婦引連れて洞燈携さへ晩餐を運び來れゞ南花女ゝ其足音を聞くよりも物慌忙〜く廊下へ出でチ、命婦殿よゝ所へ耶輸陀羅女ゝ此部屋ゑ居たまゝぬが如何ゑや妾ゝ少し要ありて參つて見れゞ誰も居ぞ何いふ譯でゐりませうと故と焦き立ち云ひけるを命婦ゝ聞て打驚ろきナニ耶輸陀羅女ゞの在さぬとやハァさてゝ聞へたこりや全く太子を失〜其上ゑ密夫の種を胎し帝へ言譯あき儘ゐ影隱〜ゑ相違あ〜左らゞ橋曇彌の御方へ急ぎ此よ〜申〜上げぬゞ妾まてが落度ありと奥を投〜てぞ走り行く跡ゐ命婦ゝ部屋へ入り其處よ此處よと尋ぬれと更ゑ耶輸陀羅女の所在しれねゞさてゝ果敢あき御思案かふ苦艱ふ堪へこのぬ御所を脱け出て故郷へよも赴むきゝあされまト是ゝ正〜く流れへても身と投げ玉ひし事あるかと心慢ろゐ騷ぐうち南花ゞ告知ゑ優陀夷の女房その外も馳來たりてみあとも〜ゑ尋ぬれと更に影さへ見へされゞた庭〜の井戸ゝ勿論流れの面てを改さめさせしゑ少しら其と思ふ事あくさてゝ此程

身の上の証據たちゐぬ故郷へも
しや逃げて行きけんかと出口々
々を改めさせーよ固より嚴ー
き御門〳〵夜中女子の出入ゐあ
ーと夜番の者の答へしより彌よ
不審れ事ありとて尙ほ御僉議ゐ
嚴しくあり耶輸陀羅女の親里あ
る加以惠國へ使者を馳らせ斯の
有樣沙汰させ夕れゞ以ての外あ
る國の醜ろき母ゐ案ト て泣き詫
れと父ゐ拳とよぎりつめ女の道よ外れたる密夫の種
持しを深く怒りて口惜涕齒をくひーめく己れやれ耻
面かゝへて親の家へ若し影あと見せゝらゞ手打よな

ーて淨盤王へ首を
捧けて口解せんと
身ぶるひーつゝ憤
とほう驚て人數の
手配ーて其行方を
ぞ尋ける加毘羅城
の御所よてゐ女中
の翼百同昔かしま
しく耶輸陀羅女の
懷胎いよ〳〵密
夫の種あるゆゑ身
をくせーふ疑ひ
あーと罵詈讒謗も

の多く去れとも優陀夷の女房ハ強ち之を眞實とせそ只御所中の有樣ヨ心を注めて親ごのひ居る單題
或ハ新御所の錠口ゐ商估一人罷り出て執次の女中ヨ向ひ下拙ハ何某と申そ呉服商の手代ゐり先日
南花樣より數々の呉服反物小切類御用ヨ就て差上げましたが御入用のもの極りまーたら殘りの品
御下げ下さる樣願ひ奉ると賴むゆゑ先づ其物を一間へ上げ件の趣むき南花の部屋へ執次ぎて言
入れけれバ南花女聞きて此度の品々何れも氣ヨ入らねバとり代へて早速見せよと云ひつゝ呉服類
の長持を炊婦ヨ舁き出ヨさせ錠口へと下げヨりる此有樣を聞くよりも優陀夷の女房人を以て止め
させーご事急あれバ自ふも舁き出ざーヨる長持の跡追來たり慌忙しく已ゐ手代ご受け取て歸ふん
とそる其所を暫ーと止めて手代ヨ云ふやうイヤ其方ハ呉服商の手代あるり左樣ヨ厶りまそ先日南
花樣の御用ゐて種々御覽ヨ入きたる品只今下げて戻りまそと聞ハて女房うち點頭左らバ何々と品
書あるべー書附と長持の内の品と引合せ點檢て持歸れと云ハれて手代ハ胸ゐ釘〳〵夫ハ。サヽ早
う品書を此處へ出ーて私ヨ見せや。〳〵イ。さあ〳〵イてハ濟ぬさゝ早う。〳〵と頭ど搔あがら其長
持の品々ハ花ヨ嵐の總摸樣月に村雲曉曙染霞ヨ千鳥の腰摸樣顏ヨ紅葉の鹿子染其外縮緬裙摸樣綸
子羽二重綾錦又ハ八丈木綿類部屋方者のふーさせまて混合御覽ヨ入れましゝと口ヨ任せて出帆題

ヨ數へ立るも堅板あふて石原ヨ水流そか如く淀む言葉ヨ偖ハと思ひイヤ口上てハ事濟そ此長持ハ
渡されぬとや立歸りて帳檢ヨめ品書を持參せよ夫まてハ我部屋ゐ封印のまゝ預かり置くと其儘奥
へ舁入きるを手代ハ忙て押止め如何ヨも去事あうら是ある品ハ外々ヨて急の御用になるもの故御
不用とあるかふハ直樣御下げ下さりませ。イヤ〳〵不用ヨ致そまし長持の内の品々ハ殘ふそ購め
て遣ハす程ヨ一々品書ヨ賣揚ーて書附を出そべし直ヨ代りを渡し得させんと退引させぬ理屈ぜめ
詮方つきて逡巡り手代ハ悄々歸りける優陀夷の女房ハ炊婦に長持を我か部屋ヨ入れさせ本夫優陀
夷と密かヨ招ぎ傍りの人を拂ひつゝ長持の樣子親がひて私語ゐふて蓋とれバ中ヨハ紫ヨ相違ゐく
縛められたる耶輸陀羅女と共ヨ潛伏り居ヨりける一人の曲漢跳り出るを優陀夷ハ手早く取て押へ
紐引と以て縛めつゝ先づ耶輸陀羅女の縛めを解き是等の惡事を聞き糺さんとの穩容ヨ言を靜ヨ
件んの曲漢ヨ打向ひ優陀夷ハ嚴ーく責問へども兎角ヨ有樣と明さねバ此奴一筋縄ヨてハ叛逆の底
を顯ハすまト左ふバ勞ハり賺し拵へ南花が日頃謀む惡事の奥底を聞き糺さんとうち點頭思案を定
め何ハ兎もあれ好きものが擒とゐりーと喜ひて嚴ーく縛ーめ其儘ヨて其夜ハ一間へ匿しおく優陀
夷ごの心ぞ奥深き偖も耶輸陀羅女を慰勞て綽の有樣と尋ぬれバ南花ご勸めし事明白ヨ語りつゝ斯く

酷き目よ遇せーよーを云々と告げ給へば夫婦い驚ろき爾ながら御運い盡ぬ喜こいーや常ならぬ御身お在せば夫婦の者を力よおされ必らぞ病らいせ玉ふおよ斯く南花が悪心の露顕の原緒よ赴むゞ最早や夫婦の明りも立ち御身の科おき次第も分り是まで強き耻辱も雪ぎ太子の還御を待設々程の如くよ御威勢を此宮中よ耀やかせ日頃嘲けり笑ひたる兩人の姫を始めとー善悪女中の顔までを見返させ中そべし先づ何い兎も角も南花女が始末を帝を始め橋曇彌へ申ー上げん御心安く思召せと夫婦ご眞實お諫めぬる言葉を聞て耶輸陀羅女も蘇生りし思ひおり爾程お南花女い心と盡して謀りー事を優陀夷の女房よ悟られて呉服の長持止めふれーと聞いて膽を冷せしが素より大膽不敵の女再度又た工夫となー優陀夷の女房の魁けーて橋曇彌の前へ進み出で喃お聞き遊ばせ見へおくおりー耶輸陀羅女廊下續きの明部屋よて密夫と出會を見附侍れば不義者と召捕へて役人衆へ引渡さんと存ぜーが怎る事の奥向きよ有ーと外へ傳聞てい不取締りの沙汰とおれば御所の者よ知さぬ樣幸ひ呉服の空長持おましお兩人とも匿し國を隔てゝ逐ひ拂ゞせんと帝のお爲を思ふから密かよ事を計畫しよ此事優陀夷の女房が知り兩人を入をー長持を其身れ部屋へ持せー故定めておーつけ御前へ出で皐妾の悪謀略おゞゝ披露を遂げるい知てあれど此義前以て皐妾よりお耳よ入れ置き奉つれば帝の御前お取做と宜ーく願上げまそると眞事ーやうよ言ひおーて己ご謀計の顯いれ口を取締ろふころ最と悪けを斯る事とい露知ぞ優陀夷の女房い夫と語らひ橋曇彌の御前へ進み出で恐れおゞら耶輸陀羅女とんひ憑るを橋曇彌早くも言葉の腰を折りイヤ耶輸陀羅女か其ことい最前篤と聞き侍る其方い不審よ思ふも道理其ことおふば聞かぞと濟むとんひ紛ふのー玉ふより女房は手持悪々をゞ箇い御言葉とも覺ゆる御一大事のこと出來ーされば其一大事とい耶輸陀羅女と密夫を長持へ入れ呉服物よ紛ふしく御所を下りるを其方ゞ見咎め其儘よ部屋よ長持留めたい宜とい云ゞ宜よ非ぞ其を如何よと云ふあらば南花ことい此御所よゞ科人を出すを厭ひ又法度の猥りおりーと外々へ洩さゞと深く思ひー計畫おり宜聞うねゞ南花の身よ疑ゞひ懸まゞ左よあらず我れ逐一よ承給れば兩人の者を嚴ーくせよと此方の言葉と反對の仰せを受けく與さめ顔。さてい兩人ご事どもい。ヲヽ最前悪敷南花より聞届けて驚ろき入る他の風評よ違ひなく不義もの〻耶輸陀羅女密夫と忍ばせて餘り阿漕の引く網れ度重おりて見あふいされ最早口解もあるまゞく此科苟且ごとなふねば最前南花よ中しつゞ獄舍を造ゞと〻のいせしのば聽て其よ紛明させん其までい其方ゞ部屋よ嚴ーく預かり置ねかー倘お詳細い重て沙汰せん能く心得てと仰せーなとい餘事の言葉よ紛らし玉

へバ是も非も逃そ女房ハ退りて部屋へ立戻り優陀夷ヨ云々と仰せを告れバ打驚ろき果れ果たるバかり也去れど彼の君の日頃の御氣質如何ヨ詞とも中々ヨ容易ヨ胸の解け玉いぬバ何と云ふても甲斐おきこと余人おゝねバ執念も諫め申そも憚りありアヽよーおき事の出來ーと夫婦心を腐まーて耶輸陀羅女ヨも告けれど儲ハ開も思ひ依らざる事さゝバ直樣橋曇彌の御前へ自ら出て南謨女がおせー綜の一伍一什を竝べたーと焦り悶へて歎かるゝを道理と思へども夫婦ハ深く案ずるヨ斯く疑ゞひの懸りー時ハ何程此方の口解をなそとも屆かぬものおれバ暫らく扣へて時を見合せ身の潔白ととゝ〳〵申し聞くが宜き分別先づ帝よりの御沙汰をバ待こそ宜けれと只管ヨ諫めおだむる程こそあれ耶輸陀羅女ハ俄ヨ差ー込み蟲氣づきたる有樣おれバ夫婦ハさていと驚ろきて慌て騒ぎつ其れ之れと産の準備を整へけるヨ問もおく田潮ヨ耶輸陀羅女ハ安々産の紐を解き玉の如くの男子を擧り是悉達太子の御子ヨて後ヨ十大弟子の其一人羅喉羅尊者と申せーハ此若宮の御事おり左れバ太子宮中ヨ在ーまーての御誕生おらバ月卿雲客竝列ーて牛馬人夫も華美ヨ門前ヨ市をおーー御誕生と賀すべ兆ヨ無憂や日蔭の御身とおり密夫の種と呼バれ人の見る目も憚かりて優陀夷夫婦の心計りヨ親子を慰勞り褒ひ置くを早くも此よし橋曇彌ヨ告るものゝおりし故帝を始め皆々知りて耶輸陀羅女ハ父おー兒を分娩せしおど云ひ觸らー或ハ鬼子畜類おんどゝ譏りて云ふ者少おらず此事御所中ヨ隱れおけれバ橋曇彌ハ忙がハーく優陀夷夫婦と召出ー悪敢此事を尋ね玉へバ優陀夷ハ由を明らかゝ告げ申すとも矢張尚ほ密夫の種おど良おき事ヨおるべけれバ云ふも強ー爾をばとて云ハぬも憂ーと心の中ゝ案せーが止事を得ず明白を告げ來まつれば案の如く橋曇彌ハ眉を顰めて宣まふ樣嗚嗟うつ〳〵おや耶輸陀羅女不義より太子を失ー侍り帝まで ヨ耻を與ふいと悪むべき姫なれバ誕生の子と俱供ヨ死刑ヨ行なへよと嫉妬の皆り逆立て仰せらるれバ優陀夷の女房ハ御尤もの御憤怒ヨて何度申そも變らねど耶輸陀羅女ゞ分晩せーハ太子の御種ヨ疑なー只計り申ーく御嫌疑の霽れべき樣ハおけれども何卒〳〵御兩方の霽のお命バつかりハお助けおされて置き玉へまヨも太子御迎ひの右將軍が歸りおバ否も分り申そべーとこと穩容ヨうち歎き諫め申せバ橋曇彌さらゞ這度構造ー獄舍へ兩人を幽閉て番人の外余人に搏へて會そることあかれ那所に糺明させ置く太子の安否知れたらバ何れとも致そべー早や其準備を申し付よと是非おき仰せヨ畏こまり女房ハ部屋ヨ退り來て耶輸陀羅女ヨ云云と語り聞かせバ打驚ろき其ハ開も何事ぞや自ふハ何おるとも此若宮ハ宥されて乳母ヨ養育させ玉ハる樣今一度願ひくれられよと云ば女房も涕を含みて開

いお道理あることながら何申しても時惡
ければ露程も透らばこそ若宮もお命のあ
るを僥倖と諦らめてともよ艱苦を凌がせ
玉へ御運さへあ
ればお兩人とも
神佛も救ひ玉い
ん今い是非おー
好時節を待せ玉
へと諫める折か
ら耶輸陀羅女を
引立ての雜式二
人使番の女中が案内よ先達て
時刻を違へず來りける左れば

天の明けき月日も雲よ懸る如
くおに暗からぬ耶輸陀羅女の
胸の鏡い淨けれど善惡おき事
を云ふ人の息の曇りお身い錆
て口解なせばおそ程よ我ゐ禍
殃とおるつらさ肌身いおさぬ
紀念おる太子の片袖身よ添て
奥の住居を引出され局々の
鑑戒とて那處此處の廊下をば
引廻さる〳〵憂なかよ心曲けー女中們い那方此方へ走ま
いり盜賊やおど見る樣よ耳語あふて騷るもあり又炊婦
お至るまで心優しき者どもい此姫の身を察し貰ひ泣し
て悲ーむも多かり偖耶輸陀羅女い若を抱き籠をし儘の

乱髪とけぬ思ひの最と辛く顔差し入るゝ腰襟の中へ了洩る血の涕さら〳〵と降りゝれゞ若宮ハッとむづかり玉ふよ最と堪へぬ咽び泣たゞ此若ゞある故よ生耻さふし目下よも蔑視れ侮ゞらるゝ是も是非あし厭ひハせト只何事も最としく思ふゞ故よ思ふあり然りらよとや諦ふめて身をも世をも思ハずハ死よし心で死ぬ身の現ともなく厳重ある獄舎の中へ牽れ入る心の中ゞ不愍あれ話頭一轉悉達太子と御迎ひよ勅を受て赴きし右將軍早馬よて立戻ゞ直様御所へ參内それば光明優陀夷附添ひて帝の御前へ進み出で恐れあから申上げ奉まつる仰せの如く舎人車匿を道案内とー晝夜と分ず檀特山の實嶺へ赴きて見てあをば什麽よも尊とき霊山よて中々凡人牛馬あゞの山とハ見へず去れゞ凡う普天の下王土よあらずと云ふ事あしと帝の御威勢よ厲まーて官人們を進ませけれゞ皆岩よ倒れ木の根ゐ轉び一人として扈従ものあきまゝ其車匿と只二人岩根踏越へ葛ゐ縋り漸くゝ辛くも檀特山の麓の谿間を攀登れゞ夫よりハ一足も進むてとかあハねゞ余議あく空を打仰きて加毘羅城の若君さる悉達太子此山ゐおハしまさゞ出迎へ御對面を翼望ゐ斯申そハ勅使なる御臣下の右將軍あゞと大音よ呼ハりけれゞ風のまに〳〵遥かある嶺の山彦よ響さけん暫あつて庵室の内より沙門一人出で此方を向し姿を見れゞ容ハ變れゞ若君よ似さとハ愚か其儘あれゞ車匿よ問ゞあれこそ聞て呆れし御容姿十善天子の若宮のお容姿ハ更よあく變れ果さる淺猿さ能ゞ命のれハそると疑がふ計りの有様よて何やふん此方へ向ひ宣まふ様よハ違目ゐ見ゆれゞ悪や山風の音よ消されて御聲ハ迴かよも聞へねゞやゝあつて傍へある大樹の下ゐ赴むき玉ひて繁る小枝を折取りつゝ後をも見ずーて庵室よ入り玉ふより大音揚げ喃暫時若君様と呼たれゞも麗届かず情けあや其儘よ御容姿も見へずあり悪みの網も切れ果て途方よ暮て居たる内又庵室と出で玉ひ此方へ向ひ件の枝を投げ玉へば風ゐ靡きて不審と手許へ落ける故是ハと拾ひ熟〳〵見れば薬師よ文字の書てあり太子と ろが儘庵室ゐ入て再度出で玉ハねゞ然ゞ是非なき之を携さへ御覧よ入れんと忙がハ〳〵ー く官人等を捨置て只今歸り候ふと事詳細ゐ奏聞ーて携持ちし枝を差出ー座さへ下つて扣へける帝ハ枝を取上げて其葉を一々御覧あるよ如何よも太子の直筆よて書記したる文よ曰く集鳥大樹群條枝發止夜明各々〳〵散後日別離相不知衆生別離亦復然と認めさるを熟く見玉ひ暫らく龍顔と傾ふけて御思案の景色ありしが御涕をさら〳〵と落ーて皆々よ宣まふ様いかゐ優陀夷ハ光明も慥よ聞け此葉よ記せー文の心ハ夥多の小鳥等ゞ大きなる樹の枝ごとよ集まり止まて堺よ囀り友呼かはーて樂ーめど淺猿しや夜明れゞ思ひ〳〵よ飛去りて再度其友よ遇を知ずさて人間とても其如く假令ゞ繁華の街

徧く遠近人の群り立て互に知も知ざるも顔見合しつ袖振り合せ言語を交さぬもあり然と入相の鐘響けば櫻とゝも散初て東へ走り西へ行き思ひ〳〵に家路に歸りて又た過ことを知ずと云ふ夫を悟らざる妙文あり之に思ひ合それば兎角此世に果敢なく〳〵く夥多の蟲に春を知らずそをよう命保つある人間の身も一ッ世界へ同じ月日に生れても他國遠國に隔りて一度も顔を合せずして死せる者數を知ず又百里二百里隔て見ず知ずの其人と夫婦となりて暮せもあり然とも箇程に深かりし緣ありながら中わるく爭論つのりて萬一に過失の出來るあり是皆前世の因果にて仇敵と仇敵の巡り會ひ共に苦艱の娑婆世界今日と云ふ日に何處かふ來て何處へ隱れて昨日となるか明日と云ふも近けれど一ト夜の壁に近くて見ねず過去現在未來なる世も其に均しければ悲しむに愚なり生者必滅會者定離空より出て空に歸る其凡体を悟りたる悉達太子に凡人なるずァ、此文にて諦らめたと是まで愚痴に迷はされ本意なき涙を費やせしと宣まひながらもせぐり來る涙に血脈を分け玉ふ親子のしるしか宜ありけり其座に連なる優陀夷光明右將軍も供供に感涙胸に忍びかねたる就中優陀夷はあられぬ思ひ漸々に頭を擡げさて恁る上からに如何にしても若君樣に御還りに無ことゝと漫ろ涙に云ふを聞き光明大臣進み出で最早紀念と贈ふせられ又もその妙文にて夢の憂世を論し玉へば御親子の對面も是までありと斷念め玉へ然る上に御世嗣に難陀太子を推擁く旦出度御代を讃り玉へァ、是非もなき有樣なりと云ふ間も已に入相過て淵と共に日に暮ぬさて其翌日となりしかば驕慢彌に云ふも更なり御所中へ太子に還行なきと知しものかふ打擧りつゝ歎き悲しみ惜むに附て驕慢彌の心の中の遣る瀬なき太子を失し御世嗣に好陽婦人の擧けたる難陀太子に定まるとの人の風評を聞き玉ひ偖に日外南花女が我に告しに違ひなく邪輸陀羅女も得心にて悉達を失して仕舞しか如何にも口惜き事ともあり最早捨置く所ろにあらず嚴しく吩附腹を慰んと南花と膝近く呼出してかに南花承たまれ太子に愈に宮中へ還ふぬに極まれど未だ落着附のざるに耶輸陀羅女が身に上あり疾にも罪に行あふ筈を優陀夷夫婦が帝とこしらへ執成し詫て助けしが乳兒も成人あさば此御所を仇敵と狙ひ叛逆の謀略致そに必定左るに依て耶輸陀羅女對の男乳兒とも少しも早く押し片附根を斷ち葉を枯そべし情けに返つて仇なりと憤怒に憤怒つて仰それば南花にと頭を下げ如何樣是に至極の御沙汰耶輸陀羅女の身の上に卑妾嚴しく彼の密夫に日外より優陀夷が預りり懷つけて何事をか談そるやゝ若し優陀夷夫婦の者が身の蟠まりを口藉の爲め件の男を瞞着め密夫の惡名を消すまじきにも非ざれに必ず御油斷遊ばそあと已が惡謀の底を入れ其まゝ

御前と退りける去程ゑ優陀夷夫婦ゝ思ひ懸けおく轎曇彌より日外の曲漢ゝ耶輸陀羅女の密夫ゐ正しく違ひあき者あれゞ此由帝へ奏聞して耶輸陀羅女と件の男乳兒も共ゑ頭搔せよと嚴しき命令を蒙りて夫婦ゝさてこそ南華奴が又もや計りゑ計りたり乞でもの見せんと膽を据件の男をゝ轎曇彌の御前ゑて吟味と遂て見せ申さんと軈て月景殿の奥庭のお階間へ夫婦ゝ立出で彼の曲漢を引出させ南華ゑも列座をさせて事嚴重ゑ言葉を正し優陀夷ゝ件の繩付ゑ向ひヤァ其處ゐ大罪人我れ計略をめぐらして今日まで厚く勞とりそうし惡謀の底を悉皆く云ゝせしろ心地よけれ恐れおがら聞しめせと轎曇彌の方と向き是あるゝ大惡無道の提婆達多か家來伯了と申そ者耶輸陀羅女を奪ゝんと此宮中へ忍びたる是ゑも手引とそる者ありと云ふより南花ゝ進み出でイヤ優陀夷どの其奴提婆の家來ゑて耶輸多羅女を奪ゝん爲め此御所へ入り込しが其ゐも手引せしものあるとゝ聞捨られぬ其一言其奴ゝ何處の者あるゐ耶輸陀羅女と過しろ密通せしを目前ゑ我れ見しからゑ捕押へ公然さて罪せんとゝ存せしかとも爾そをゝ他國へ聞へ此御所の法度猥りの御耻と人ゑも沙汰せず内密ゑ兩人とも遠國へ放逐ゝせて澤さんと深き心の我ゞの計ひさそれゝ事穩便ゐ濟べきものと謂おき其方夫婦が支へゞて其も聞へた是や此御所の御耻辱を他國へ聞かせ帝の耻を招がるゝ夫のみゐゝず不義者の手引せし者あるやうゐ今言れし其仔細聞かずゑやゝ置く可きか捕へしゝ妾ゐり不義の手引を致したとゝ何を以て云るゝぞと口幅廣ゑ罵しれゞ優陀夷莞爾と打笑つゝホ、問れずとも一伍一什其方の惡謀を云ひ明さんヤヨ侍衆南花女を油斷なく捕稱めされハッとの答へゝ南花女ゞの胸ゑ答ゆる色を見て尙ほつけこみて詰寄優陀夷左れども南花ゝ膽太く膝立なほして擬笑ひヤァ此老女を捕稱とゝさて優陀夷殿片腹痛し是まで夫婦が大望ありて悉達太子を逐失し其叛逆の顯ゝを口身の禍殃を他人へ塗るさても呆れし人達かゐと爭論さふを轎曇彌左右を止めて優陀夷ゑ對ひイヤ其方夫婦よく聞々かし其繩附ゝ南花女ゞ捕押へし曲漢ゑて耶輸陀羅女の密夫と前以て聞侍る然を提婆の家來とゝ定めし深き仔細ゞあふん其語をよと宣まへゞ優陀夷の女房進み出で然れゝ其義ゑ侍るがし過頃耶輸陀羅女の行方なくゐゑ玉ひしを殊ゑ不審く思ふ折柄南花女の部屋より出る長持是ゞ胡亂と引とゞめ檢査め見しゑ案の如く此奴耶輸陀羅女と奪ひ行をも縛めゐば反つて白狀致しそまゝと勞ゝりゐだめて其惡謀を漸やくゑ吐出させ提婆の名前彼れゞの名まで疾ゑ詮索遂げ侍ると云ふより優陀夷聲高ゑヤィ伯了此間我ゑ白狀せし如くよもや相違ゝあるまいゐ但し又言分あるや轎曇彌の御前ゑく返答致せと疾視れゞ繩附の伯了ゝ優陀夷ゞ顏と見るよりも一旦謀り賺されて白狀

せしゆゑ言譯
おく又南華の
顔見れゞ睥睨
よりける其光
りゝ堅く約せ
ー大望を能も
白狀ーおつた
あと責る如く
よ見へける故
那方此方よ氣
もそゞろ兎も
角も言纏め一
命を助ふ㊀

㊁んと優陀夷よ向つて諧詫
やう過頃不思く覺えもおき
事云ひさりしが全く狼狽此
御所へ忍び入りーゝ外あふ
ゝ名よ聞へたる宮の搆り御
美事あるを見まゐしくと云
せも果た優陀夷の女房ナ
ぞうゐ前後合ぬゐせ頭ひを
叩かずとも惡謀の筋ゝ云ふ
よ及ゞず一味
の者の名前ま
で詳細かよ白
狀せよさそれ
ゝ命ゝ助けて
とふゝと云ふ
より伯了が包
まず白狀しも

そるかと南花女ゝづか〳〵お階間より下て繩附の傍へ行きヤイこゝあ愚賊め騙されて何云ひーぞ耶輸陀羅女と不義せー事有樣よ白狀せゞ命ゝ術よく助かるべきよ氣迷ひしう愚鈍千萬形もおき事言ずとも明白よ白狀せよと目顔で夫と知るれど胸騒搏て返辭をせぬゞ此奴生ーて置くときゝ叛逆の妨害と思ひーかゞ南花女ゝ手早くも繩取の足輕の刀手込よ扳手も見せず伯了が首打落せゞ橋曇彌優陀夷夫婦侍士們も打驚ろけゞ南花ゝ橋曇彌よ打向ひ斯く此奴めと耶輸陀羅女を失ーてーまへゞ法度もたち他國へ聞へて耻かーろふぴと云ふ傍へより優陀夷の女房ヤア南花殿其方の惡事の露顯口夫を瞞めん其爲よ手先よ遣ひー伯了の首打て事濟と思ふ心の淺猿さ最早篤くとよふんざ眼目此處一寸も動さめさるおと詰寄れゞ又ゝ擬笑ひゾリヤ此方で云ふ言葉太切なる太子を失し好陽婦人と同腹で難陀太子を御世嗣よ致さんとする深謀古手な事して後悔とお良まゝ何ゝ兎も角も橋曇彌の御方へ密かよ告申を仔細あり先づ御入りと陳るより橋曇彌ゝ入り玉ひ只南花の言葉よ從がひ優陀夷夫婦ゝ只管よ疎まるるこそ口惜けれされゞまゝよ痛ゝーきゝ耶輸陀羅女若宮ともよ獄舍の內よ幽閉られ昨日今日と思ひーよとや二タ年餘りとなり辛きおかある樂しみの若宮を抱き取り太子の紀念の片袖を取出ーて宣まふ樣ァ、思へゞ戀し恨めーい此片袖の之おくゝ忘るゝ隙もあるべきよ今ゝ紀念も仇ありと歎つ涕ふ暮告る鐘の音さへも曇りたる折ーも俄かふ降出る雨ゝ篠衝ごとくよて最と物凄き宵暗よ獄舍の小窓へ女の聲耶輸陀羅女遠ー見てヤァ汝ゝ局ぢやおいゥチ、姫君樣お懷かーう存ドまそチ、能く來てたもつた遇たかつさと計りよて先達ものゝ弟なり局ゝお道理〳〵と伏轉びつゝ泣沈稍あつて涕を拂ひ嘶や嘶長々の御紀明辛きことよておゝそべし疾かふお目よ羅り度種々よ思へども何を云ふよも人目の關殊よ法度ゝ嚴しくて何一ッ食物を上げる事さへあらず神佛よ祈誓をかけ今日ゝ埒ごの明ことう明日ゝ何うと待甲斐も泣明そもとや二タ年越若宮樣ゝお壯健おかと尋ねられで耶輸陀羅女されゞ若宮ゝお壯健よて今までお目ごの覺ふれしごの今熟々とお察入ぢおと抱きー儘よて小窓口局ゝ爪だち差覗きチ、それが若樣か案じさよりも御成人太子御所よあるおらゞ綾錦とめそものを薄着げ上よ垢染ー單の衣ゝ何事ぞと歎つ傍より局と共よ忍び來りー女童それと見るより小窓へ縋り姫君樣かお惜ーやと云ふ顏熟々御覽ドて汝ゝ小間使よう來やつゝと云ふ傍より局がさし出で又云ふやう喃姫君聞しめせ卑妾がおん身を案じ神佛へ心願して茶斷鹽斷るを見て此子もともよ打案じ食物さへ喰ずして水を浴て祈りまそよと聞くより姫ゝあふれぬ思ひヤ、おんと云ふ年端も行ぬ汝までが私を主と思へゞこう斷食しての神頼みコレ嬉しいぞやう

とけあんと女子心の嬉しさよ兩手合せて宣まへバイヱ勿体あん私ーよお禮成る事あらバ御身よかゝり御苦勞と助けたく思へど更よ譯知れぬ何卒早く舊の樣よ太子樣もお歸りあり貴方を宮中へへましたゝとゝたいなゝも賢こくも涙と共ゝ云ひなれバ耶輸陀羅女ゝ堪へかぬヲ、能ころ云ふてたもつよ私故苦勞をーあからも其を怨みず夫程まで思ふて呉る兩人ゞ親切私ゝ私とて覺悟ゝそれぞ汝や局ゞ長の年月衣服の世話から賄ひも儉約かよ才覺ーて妾ゞ尋常よ勤めしも皆汝等の働らきぞやうれよ爾らーひ事とてゝつひよ一度も爲て取らせず偖々酷ん仕方ぞと必らず怨んでたもるあよ口よゝ云ゝねど心でゝ何卒首尾よく美麗く下初め致させて好き男を持よせてやり末長く目を懸んと文庫の内の拵らへまで其も此もと整へし折拵思ゝぬ身の災難若ーー自らゞ此儘よて縱令果敢あくあるとても主從ゝ三世の緣來世ゝ汝が家來と生れ此世の恩を報ぜるぞや虛言ならぬ妾ゞ心かあらず疑ゞふくよもるなと詫たまふを局ゝ打消しイヱ其れ所ろでゝムりませぬ昨日南花よりの達しよゝ耶輸陀羅女ゝ親子とも愈よ罪よ行あゝる然れバ姫の從屬ゝ昨日中よ引拂へと忙ーくお部屋を明させて皆々宿へ下りーゞ身妾一人此子と連れ雨と僥倖忍び來りし其仔細ゝ下素下人の手よ懸らふよりお膝と膝を組交し三人一所よ死覺悟と思ひ切て云ひなれバチヽろりや道理妾とくも是まで

幾度死たくゝ思ひ詰し事なれど今日まで生耻曝せしゝ只御不愍な此若樣また二ッふゝ悪達樣よ別るゝ時の仰せよもお腹の兒ゝ紀念ゞよ又遇までよ怪我さそなと宣まひしが力種命かしくて云ふでゝあけれど一人死ると彌よ以て淫行もの〳〵名と取らん又死とても汝達を何で一所よ殺されう妾一人御沙汰を待ち敢あくあるゝ天命と斷念め居ると宣まへバ如何樣死るも安大事左らバ是に持來しゝ悪事災難を免がるゝ觀世音のお身繪よ侍り之を差上げ奉まつれバ能く心信をあーー玉ひて寃枉の罪を免ごれ玉へと小窓より差出せバ耶輸陀羅女ゝ受取り玉ひコハ何よりの贈物あらあり難ーかたトタなしと戴ごき玉ふ其の折拵今此事の有樣を見附來りし獄舍の番人ヤァ此奴等ゝ雨夜を見込み佛性ある我々ゞの宵寐の隙よ何處よりゥ忍び來りし不埒者疾々其處を立去れと不慘や局と女童が襟掻攫み引出されコレ喃暫しと泣詫れバ耶輸陀羅女も窓の内より聲掛け玉へど耳ゝよゝ懸けず何の容赦も荒呉男むざ〳〵と引捕へて搦柵の外へぞ銜遣りけり

釋迦八相倭文庫六編下之卷終

明治十六年八月十日出版御届　一冊定價金十五錢　郵税四錢
明治十八年一月十二日出版

出版人　東京府平民　大野吉之助
出版所　京橋區瀧山町四番地　斯文堂
發兌　仝　五番地　報告堂
取次　仝　四番地　嚴々堂
仝　神田區神田雉子町　報告堂支店
仝　牽馬縣前橋本町　倉田太一郎
仝　京橋區南鍛冶町　書肆
各府縣

○斯文堂發兌書目

一校訂繪本眞田三代實記　全三十冊毎月二回出版　五回出版　一冊定價十五錢郵税四錢
一眞書重訂釋迦八相倭文庫　全凡三十冊毎月二回出版　五回出版　一冊定價十五錢郵税四錢
一繪本曾我物語　全部既成
一松染情史秋七艸　全四冊毎月二回出版　近刻　一冊正價十錢郵税四錢四冊前金卅五錢
○繪本太閤記　○繪本甲越軍記
○開卷驚奇俠客傳　○俊寛島物語
○朝夷奈巡島記　○近世美少年錄
○皿々鄉談　○常夏双紙

○美農古衣八丈奇談　○繪本漢楚軍談
○繪本通俗三國志
以上近刻

報告堂同盟出版ノ部

○甲部同盟出版書目

一資治通鑑　全六十冊　定價廿五圓　豫約廿圓　十五回出版　十一回既刷
一漢書評林全凡廿八冊　定價十圓　豫約七圓五十錢　十回出版　八回既刷
一佩文韻府　全百六冊　定價八十圓　豫約四十五圓　廿一回出版　五回既刷
一史記評林　全廿五冊　定價十圓　豫約上七圓並六圓五十錢　六回出版　四回既刷
一十子全書全三十二冊　定價十二圓　豫約七圓十錢　七回出版　二回既刻

○本部同盟出版書目

一官令新編索引類別目錄　全三冊　定價四圓三回出版　豫約二圓八十錢近刻
一佛國法理論　全一冊　定價一圓郵稅二十四錢
一全刑法詳說　全一冊　定價一圓廿五錢　郵稅四十錢
一全民法解釋　全一冊　定價二圓　郵稅五十八錢
一全訴訟法原論　全一冊　定價二圓五十錢　郵稅仝
一全政典　全一冊　定價一圓　郵稅二十四錢
一政理汎論　全六冊　一冊定價四十五錢豫約一冊三十錢郵稅十二錢一回既刻
一全世界一大奇書全冊五冊　一冊定價廿錢郵稅四錢豫約一冊十五錢九回既刷
一仝　自一回至五回別製合冊全一冊定價金壹圓郵稅廿錢

○乙部同盟出版書目　印刷着手ノ部

一本朝文粹　正全七冊定價三圓　豫約二圓　續全四冊定價三圓　豫約二圓　全部既成
一太平記　全十二冊　定價三圓　全部既刷
一源平盛衰記　全十五冊　定價三圓五十錢　豫約二圓三十錢　四回出版　二回既刻

○同盟出版見本并方法書御入用ノ向ハ二錢ノ郵便稅御送附次第呈送スヘシ但シ書籍代價郵便切手ニテ御送附アルハ一割增加アリタシ